



# 府立須知高等学校の在り方検討会議(第3回)

= 配布資料 =

(平成29年7月3日)

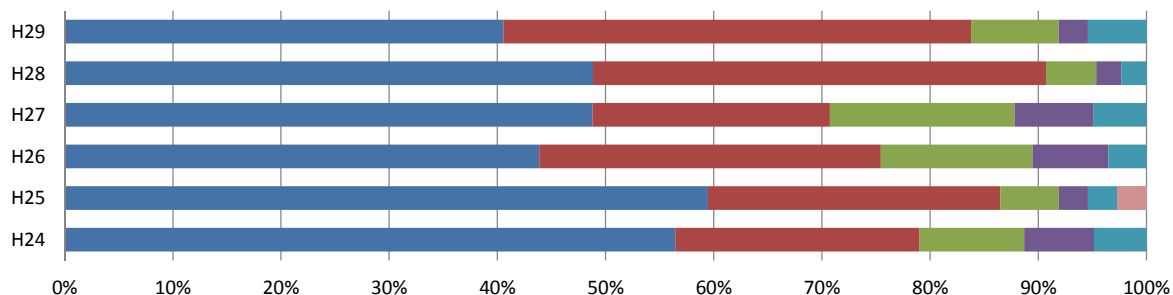
名 称	頁番号
須知高校の入学者状況(出身中学校別)	1
地元中学校(京丹波町)卒業生徒の進路状況	2
須知高校卒業後の進路状況	3
口丹地域の高校毎の通学区域等	4
口丹地域の中学校・高校の配置及び中学校別在籍生徒数	5

## 参考資料

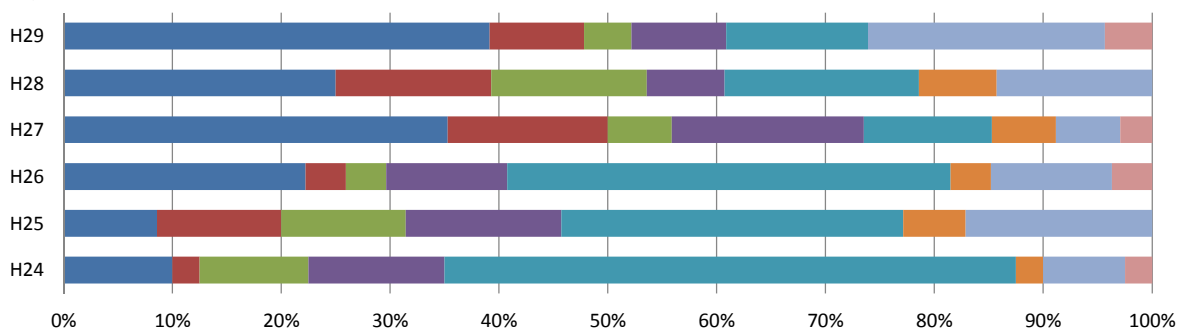
第1・2回検討会議の主な意見(まとめ)	—
---------------------	---

## 須知高校の入学者状況（出身中学校別）

### ◆普通科



### ◆食品科学科



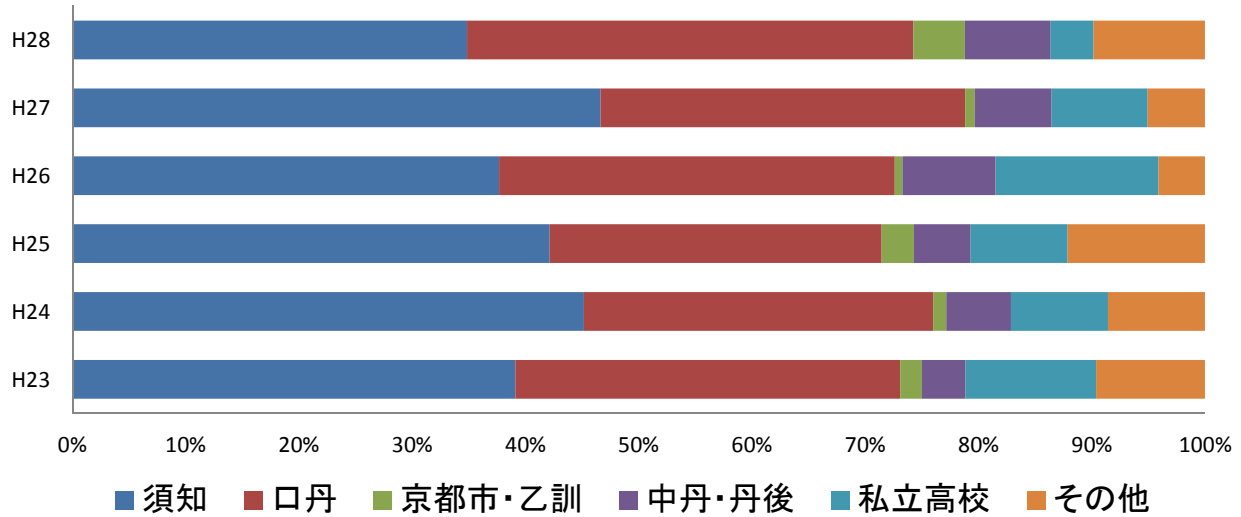
■ 蒲生野中学校 ■ 瑞穂中学校 ■ 和知中学校 ■ 南丹市 ■ 亀岡市 ■ 中丹 ■ 京都市・乙訓 ■ その他

年度	普通科						食品科学科						総計						
	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H24	H25	H26	H27	H28	H29	
京丹波町	蒲生野中	35	44	25	20	21	15	4	3	6	12	7	9	39	47	31	32	28	24
	瑞穂中	14	20	18	9	18	16	1	4	1	5	4	2	15	24	19	14	22	18
	和知中	6	4	8	7	2	3	4	4	1	2	4	1	10	8	9	9	6	4
	計	55	68	51	36	41	34	9	11	8	19	15	12	64	79	59	55	56	46
南丹市	4	2	4	3	1	1	5	5	3	6	2	2	9	7	7	9	3	3	
亀岡市	3	2	2	2	1	2	21	11	11	4	5	3	24	13	13	6	6	5	
中丹							1	2	1	2	2		1	2	1	2	2	0	
京都市・乙訓							3	6	3	2	4	5	3	6	3	2	4	5	
その他		2					1		1	1		1	1	2	1	1	0	1	
合計	62	74	57	41	43	37	40	35	27	34	28	23	102	109	84	75	71	60	
募集定員	80人	80人	80人	60人	60人	60人	40人	40人	40人	40人	40人	40人	120人	120人	120人	100人	100人	100人	
定員割れ人数	18人	6人	23人	19人	17人	23人		5人	13人	6人	12人	17人	18人	11人	36人	25人	29人	40人	

- 普通科の入学生は地元の中学校出身者が大半である。 (人)
- 食品科学科は地元以外の生徒が半数程度を占めている。
- 普通科、食品科学科(H24除く)ともに、入学者が募集定員に満たない状態が続いている。

# 地元中学校（京丹波町）卒業生徒の進路状況

## ◆京丹波町立中学校（蒲生野・瑞穂・和知）卒業生徒の進路状況（3校の計）



年度		H23	H24	H25	H26	H27	H28		
全 日 制	須知	普通	52	68	51	36	40	34	
		食品科学	9	11	8	19	15	12	
		計	61	79	59	55	55	46	
	口丹通学圏	亀岡	普通	11	6	9	12	3	12
			数理科学	6	4	3	4	4	1
		南丹	総合学科	8	11	5	9	5	14
		園部	普通	19	24	20	18	18	14
			京都国際	8	4	3	7	7	7
		農芸	農業学科群	1	5	1	1	1	4
		計	53	54	41	51	38	52	
		京都市・乙訓通学圏	3	2	4	1	1	6	
		中丹・丹後通学圏	6	10	7	12	8	10	
		私立高校	18	15	12	21	10	5	
		その他（府外も含む）	15	15	17	6	6	13	
	合計（3校の卒業生徒数）	156	175	140	146	118	132		

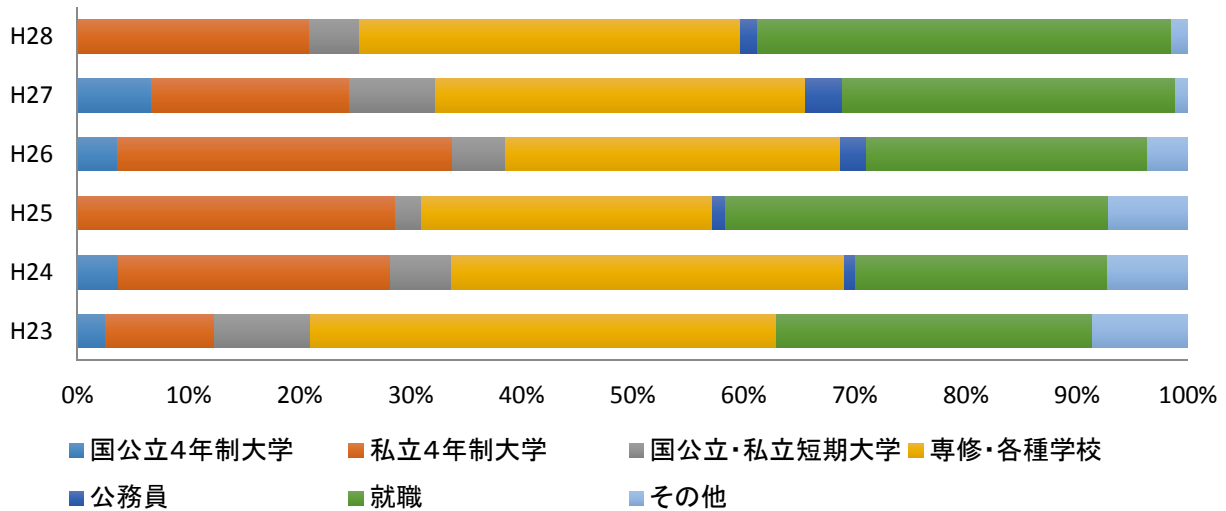
(人)

○京丹波町立中学校3校の卒業生徒に占める須知高校への進学割合は4割前後である。

○全体の3割前後が口丹通学圏の他の府立高校に進学しており、そのうち園部高校が半数以上を占める。

# 須知高校卒業後の進路状況

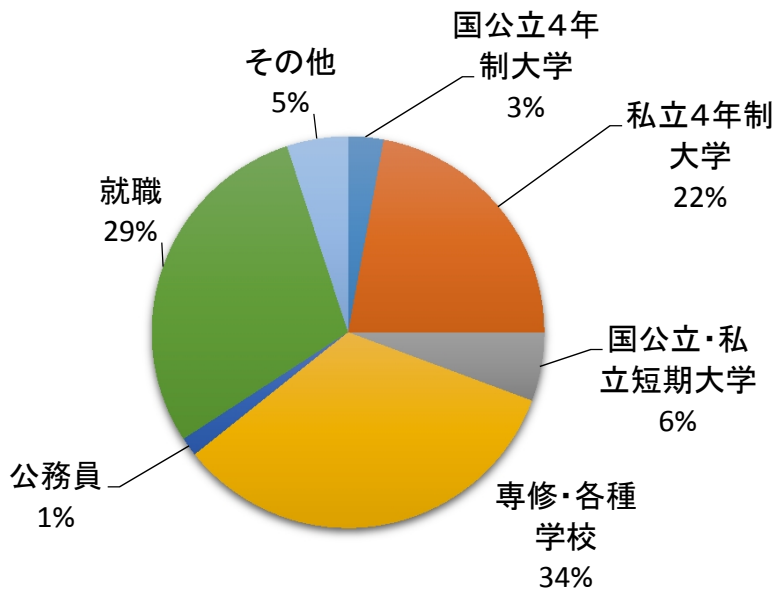
## ◆過去6年間の進路先別人数



年度	H23	H24	H25	H26	H27	H28
国公立4年制大学	2	4	0	3	6	0
私立4年制大学	8	27	24	25	16	14
国公立・私立短期大学	7	6	2	4	7	3
専修・各種学校	34	39	22	25	30	23
公務員	0	1	1	2	3	1
就職	23	25	29	21	27	25
その他	7	8	6	3	1	1
合計	81	110	84	83	90	67

(人)

## ◆各進路先の占める割合（6年間平均）



## 口丹地域の高校毎の通学区域等

### [全日制課程]

学校名	学科	通学区域	
		通学圏等	学区
北桑田	普通科	口丹通学圏	京都市(周山中学校の通学区域に限る。) 南丹市(美山中学校の通学区域に限る。)
	森林リサーチ科	府内全域	—
亀岡	普通科	口丹通学圏	亀岡市
	普通科 (美術・工芸専攻)	京都市・乙訓通学圏 口丹通学圏 ※調整区域:山城通学圏、中丹通学圏、丹後通学圏	—
	数理科学科	府内全域	—
南丹	総合学科	亀岡市の区域 ※調整区域:京都市・乙訓通学圏、山城通学圏、 口丹通学圏(亀岡市の区域を除く)	—
園部	普通科	口丹通学圏	南丹市(他の学区に属する地域を除く。)
	普通科(中高一貫)	—	—
	京都国際科	府内全域	—
農芸	農産バイオ科 環境緑地科	府内全域	—
須知	普通科	口丹通学圏	京丹波町
	食品科学科	府内全域	—

### [定時制課程] (通学区域は府内全域)

学校名 (分校名)	学科
北桑田 (美山)	農業科
	家政科

★口丹通学圏の高校(普通科)にあつては、当該高校の学区を除く通学区域から入学できるのは、普通科募集定員の20%以内とする。なお、前期選抜については、中丹・丹後通学圏からも志願できる。  
例)須知高校の場合:普通科募集定員60名[29選抜]  
・・・京丹波町以外から入学できるのは12名まで

### (参考)口丹地域から志願可能な管外の高校・学科[抜粋]

学科	学校名	学科	学校名	学科	学校名
農業※	桂	情報	京都すばる	その他専門	南陽
	綾部(東)	福祉	京都八幡(南)		福知山
	峰山(弥栄)	体育	乙訓		西舞鶴
工業	田辺	音楽	京都堀川音楽		西京
	工業	美術	銅駝美術工芸		京都工学院
	峰山	その他専門	山城		堀川
	京都工学院		烏羽		紫野
商業	京都すばる		嵯峨野		塔南
	大江		桃山		総合
水産	海洋	城南菱創			
家庭	峰山(弥栄)	京都八幡(南)			

このほか、普通科(スポーツ総合専攻、総合選択制、単位制)で志願できる高校が複数有り  
※農業科のうち桂及び綾部(東)は対象外区域有り

# 丹波地域の中学校・高校の配置及び中学校別在籍生徒数



■平成29年度 出身中学校別高等学校の在籍生徒数 単位:人

高校(学科・生徒総数)	中学校	亀岡市立								南丹市立				京丹波町立			京都市立	左記以外
		亀岡中学校	別院中学校	南桑中学校	育親中学校	亀岡川東学園	東輝中学校	大成中学校	詳徳中学校	美山中学校	園部中学校	八木中学校	殿田中学校	蒲生野中学校	瑞穂中学校	和知中学校	周山中学校	
北桑田高校	普通	全119人	1							39	1		1				73	4
	森林リサーチ	全68人						2	1	2	1		4				15	43
亀岡高校	普通	全712人	153	9	74	39	20	171	77	57	3	36	26	19	14	3	6	5
	普通(美術・工芸)	全89人	6	1	6	3	3	9	6	4		6	2	2	1	3		37
	数理科学	全84人	18	1	2	2	1	9	4	6	3	7	6	7	6	2	1	9
南丹高校	総合学科	全526人	90	10	73	25	21	112	76	31	4	18	17	6	18	3	7	15
園部高校	普通	全285人*	2		1	1		2		2	9	154	31	33	15	23	11	1
	京都国際	全70人	4		7	3	1	7	5	3	2	8	5		12	1	6	6
農芸高校	農業学科群	全272人	15	3	19	17	7	14	13	9	1	19	7	2	3	3		140
須知高校	普通	全118人	1						3			4			56	43	11	
	食品科学	全75人	2					1	2	4		5	1	2	26	9	7	16
北桑田高校美山分校	農業	全16人			1				1		1	4	4	1			2	2
	家政	全12人	1			1					2	1		3	1		2	1

・附属中学校からの進学者数を除く。

平成29年5月1日現在

・亀岡市立亀岡川東学園には高田中学校卒業生を含む。

## 府立須知高等学校の在り方検討会議第1・2回の主な意見（まとめ）

### 地元中学生の進路希望

- ・中学生には多様な進路選択の状況がある。成績上位層は他校に向いており、また、部活動を頑張りたいという生徒や、多様な進路先を希望する生徒が多いことに加え、小・中学校の時から続く人間関係を新たにしたいと、地元から多くの生徒が通っている須知高校以外の高校を希望する生徒もあり、その点では大変厳しい状況がある。
- ・28年度末に卒業した中3生の進路希望について卒業前に行ったアンケートによれば、「進学予定の学校を選んだ理由」として、様々な家庭の経済状況もあることから「通学に便利」という声が一番多かった。このほか「この学校で学習を深めたい」「志望校で自分の力を高めたい」という順で多く、生徒の素直な気持ちを表していると思う。

### 魅力ある学校づくりに向けて

#### 【検討の視点】

- ・須知高校は少人数密着型で指導されており、大学進学でもSA（スーパーアドバンスコース）を中心に大きな成果を挙げておられ、弱い立場にある生徒の守りの要であると思っている。また、京丹波町の産業ネットワークとの連携によるインターンシップにより、須知高校の印象がじわじわ変わりつつある。SAの成果・評価、食品科学科の評価に加えて、丹波観光プランコンテストなどの活躍で須知高校もどんどん変わっていくのではないかと。須知高校の在り方については、人数だけではなくそうした視点で捉えることが大切だと思う。
- ・過去の統計を見ても町の中学生の概ね4割前後は須知高校へ進学している。この地域は広域で、しかも公共交通機関がきちんと整備されておらず、交通費が非常に高額である。須知高校をはじめ口丹地域も含めた公立高校全体の有り様とも大きく関わると思うが、全ての子どもが高校教育を受けることを担保できる方向で議論されたい。
- ・須知高校は地域創生のモデル校としての発信機能を持つ可能性がある。島根県立隠岐島前高校の場合、魅力ある学校づくりとともに、地域の自治体が全力を挙げて県と一緒に取り組まれた。この須知高校の学区である京丹波町はまさにその条件をしっかりと有しており、今後の検討にあってはそうした地域創生の視点からもぜひ検討してほしい。
- ・産業教育としては農芸高校との棲み分けが重要だと思う。地元には食品関係の企業はたくさんあり食品科学科についてはそちらと連携できれば良いが、そのためにまずは産業としての食品関係企業が元気でないといけない。行政側の課題もそこにあると思う。
- ・食品科学科も含め多面的に須知高校をどうするかを考えることが大切である。少子高齢化は当面続き、全国的に対策が行われているが、子育て世代でも田舎に住みたい、移住・定住したいという田園回帰が徐々に増えつつある。当面はこのまま推移するが、将来的な展望をしっかりと描き、今の地域創生の取組によってどの程度変わってくるのかも十分検討する必要がある。

- ・普通科と食品科学科ではそれぞれ残し方が異なってくるのではないかという気がする。食品科学科は、京都府農牧学校からの長い歴史を持った農業関係の学科を設置しており、他の通学圏からも進学できるということなので、アピールするところを考えて生徒を集めるという施策が必要であろうと考える。一方、普通科については、生徒の多くが大学等に進むことを考えていると思うので、いかに高校卒業後の進学ができる学力をつけていくかで特性を出していくことが必要ではないかと見ている。

#### 【教育内容等】

- ・地元でホッケーをやりたい、続けたいという強い思いをもっている子が徐々に増えてきていると思う。町を挙げて支援していただき、非常に素晴らしいホッケー球技場を整えていただくなど恵まれた環境がある。他府県の子どもをこちらに連れてくる手立てがあると、よりホッケーを通して学校を盛り上げていけないか。また、子どもにとって憧れる新しい指導者がいることが大切だと思っている。若い教員も採用してもらい、新しいホッケーづくりができればと思う。
- ・府立トレーニングセンターと須知高校は近い。食品科学科に調理師免許をとる学科を設けてはという話もあったが、町と府が一緒になってトレーニングセンターでアスリートの養成をするのであれば、そうした方に対して総合的に食事をまかなうような取組を須知高校が行うなど、調理の学習をしてはどうか。高校生の段階から取り組むことにより、より多くのものが身につくのではないか。ぜひ丹波自然運動公園や町の給食センターも一緒になって、実習をカリキュラムに加えていただきたいと思う。
- ・須知高校はホッケーで魅力づくりをしていこうということなら地域も後押しができる。ホッケーを中心として、3点考えてみたのだが、ホッケー中心の体育。また、海外との交流を考えると英語圏が多いので徹底して英語の勉強が必要であること。そして、寮を整備した上で「土から食卓まで運ぶ」を生徒が実現するために調理の資格もとれるような普通科でも職業科でもない、スポーツを軸とした立体的な学科構成ができないか。
- ・町事業でオーストラリアと長い間交換留学を行っており、1年間に6名程度交換留学をするが、地元の須知高校の生徒に行ってほしいと募集するが、なかなか希望がなく他校生徒から希望がある。できれば須知高校からも行ってほしいという気持ちがある。国際化の時代でもあり、英語がメインになってくると思うので、英語をより積極的に学ぶようにしてほしいしそういう流れができれば強みになると思う。
- ・「学舎制」についてだが、須知高校と園部高校で言えば、中高一貫のある園部高校に行きたいと保護者や本人が希望する場合、「学舎制」は良いと思う。一緒にすれば校長は一人で両方を兼務し、教員も兼務となる。例えば、英語について、わざわざ園部高校に行かなくても同じ教え方をしてもらえとなれば、須知高校にいれば良いのではないかということになる。もしそうなるのであれば80%近い子どもが須知高校に残ることになる。この際そういう形をとってもらっても良いと思う。



## 通学の利便性

- ・通学距離の問題は保護者としては大きい。町内で遠いところだと園部高校まで約40kmほどある地域もある。必ずしも須知高校が近いというわけでもないが、それでも20km程度であればまだ助かっている面がある。地元の学校で子どもたちが学び、地域行事等に積極的に参加して地元に残ってもらえるような教育をしていただければと思う。
- ・和知から須知高校への交通が不便である。ぜひ和知からも園部からも通いやすいようにバスを整備してほしい。ホッケーの関係でも活用してもらえば良い。須知高校の校門前は、多いときには送りに来る保護者で混雑する状況である。ぜひ交通の便について考えてもらいたい。
- ・須知高校への通学費がとても高いという課題がある。したがって、全寮制で教育を行うということも大きな選択肢である。そのことも含めて総合的に判断すべきである。私見だが、府立丹波自然運動公園が近くにあるので、旧合宿所など現在ある施設の活用も考えられる。

## 地域における高校の役割・在り方

- ・京丹波町にとって、公立高校は人材を育成し、地元の担い手として働く若者を育成する機関という役割があると思う。町が設置した須知高校の在り方懇話会では、地域社会を守る教育機関の役割という観点から、須知高校において、地域の人材・担い手としての教育をしていただき、この故郷を守る素晴らしい人格形成をしてもらうためにも、なんとしても残してほしいという意見が多くあった。
- ・単に生徒数の問題だけでなく、公共交通や医療と同様、今日の広域化した地域において公立高校の役割は非常に大事である、ある種の社会資本として位置づけ、できる限り行政の単位（町域）と揃えておくことが必要だと、府の教育行政上しっかり位置づけてもらいたい。
- ・京丹波町の小・中学校のPTAへ聞き取りでは、「わが子の進路に関する基本的な考え方」について、よく話し合った上で子どもの自主性を尊重するという意見が多かった。「京丹波町における須知高校の役割についての思いや願い、期待など」については、地域と連携し、高校の特色を活かしてほしいという意見が多かった。少数ではあるが「学生寮の設置」や「行政が力を入れていた木質バイオマスや林業などに関わることが学べないか。」という意見もある。  
「今後の須知高校の在り方について、教育充実、活性化に向けての意見や要望」に対して48件と多くの意見をいただいた。「子どもの進路が分かりやすく実現できる学校に今後もステップアップしてほしい。」「多くの先人たちが創り上げてきた京丹波という郷土をこれからは自分たちが担っていくのだという思いで学ぶ生徒が育つ高校であってほしい。」「専門性の高い内容が学べるようにしてほしい。」「小・中学校との交流で高校について早くから知ってもらって身近に感じてもらいたい。」「他の高校にない環境や学科の特性を活かし、さらに魅力的で独創的で地域に開かれた教育実践ができないだろうか。」などの意見があり、この項目でも須知高校の特色を活かした地域との連携を望む意見が多かった。
- ・高校が1つの行政区の中にあるということは、商工経済団体にとっては、例えば制服代の収入など活性化につながり、近年の地域創生の根源たるものだと思っている。財政面のこともあるだろうが、教員数の問題や少人数によるカリキュラム

上の課題、学校規模の考え方などを行政として見直してもらわないと、高校の存続はまずないと考える。高校が存続されないと商工経済団体に大きな打撃になることを考慮して検討を継続してもらいたい。

## 地元地域・自治体等からの支援

- ・ 5年後には中学3年生が100名になる。つまり3年生数では今の定員が埋まらないという状況になる。従って、逆にIターンのように人を呼び込む流れをつくる必要があるのではないか。北海道の三笠高校のように市がバックアップして取り組んだ例もある。同窓会もそういうことをしっかりと発信していかなければならない。危機感を持って学校や町とも連携をしながら提案をしていくことが必要である。要望するだけでなく、こんな学校であるべきだと前向きに提案するという当事者意識を持たなければいけない。
- ・ 成功しているところは、町がかなり支援されていることもあり、存続というよりも新しい須知高校の創生として取り組むべきと考える。そのため、単に存続してくれということではなくこんな案はどうだと町と連携しながら考え、町づくりの施策の中にも須知高校を位置づけていただいている。こうした取組を府にも理解いただき、それに応える学校体制も整えてもらいながら意見交換をしていきたい。
- ・ 高校を考えるにあたっては、京丹波町の町づくりに資する高校の在り方について考えるべきである。地域の子どもが減っていく中であっても高校がこの地域の創生にしっかりと役割を果たし、そういう高校に多くの人が魅力を感じて町外からも来ていただける。いわば地域創生のモデル校としての須知高校の今後の充実に向けて、地元教育委員会としても全力をあげて一緒になって取り組みたいと思っている。
- ・ 他市町では例を見ないような活性化協議会をつくって須知高校とPTA、町が一緒になって考えることを実践している。そこでの意見を少しでも予算化し、支援できればということで、通学費補助のほか、町でできる限りのことをしようと思っているが、これからも須知高校の皆様と協議して具体化していくことが大切だろうと思っている。
- ・ 南丹広域振興局で、亀岡市、南丹市、京丹波町と商工会議所が主となって、高校生に地元で就職してもらおうということで、京都中部ものづくり産業ネットワークがつくられた。その成果として、南丹高校の総合学科に工学系列ができ、商工会議所から機械を提供したとも聞いている。須知高校に対しても、「産」がしっかりと努力をして、高校生に実力をつけてもらえる体制づくりが必要ではないかと思う。
- ・ 地元を支え、担い手となる子どもを小学生のときから育てていくことがとても大切であり、小学校の時から高校進学を見据えたキャリア教育ができるのではないかと考えており、地域ぐるみで私たちの町の高校の活性化に向けて頑張っ取り組んでいかなければならないと思っている。